

# 北奥羽の自由民権論者

## 角鹿忠四郎について

稲葉克夫

角鹿忠四郎の名が正史に現われたのは、明治十三年三月二十八日の自由民権派、蓮華寺集會の代表委員としてと、十三年から十七年にかけての鞆<sup>トモ</sup>駈事件においてであるが、その活動内容は審うかでない。

彼は旧姓を柴崎といい、野辺地町馬口の旧家で旧藩時代、兵取り締まり役で舟屋、回船業を営んでいた。マールキしこと、三代目、柴崎権三郎の次子・鹿四郎——<sup>⊕</sup>家を創設上の二男である。

安政四年八月廿四日生まれ、後に同町の醸造業、回船内屋で、南前藩長者番付にも載った。困カフキしこと、再婚吉兵衛の長せき系（安政六年三月三日生まれ）と結婚し、吉兵衛の養子となった。

彼の思想的素養はどう進つたらよいだろうか。残念ながら現在はそれを知るべき直接的資料がない。それで縁戚の吉米延、青藤の老師邸から聞いた、彼等らの祖父忠四郎の従兄、稲本斉一の面影から、モニタージユ写真式

に忠四郎を復現する方法、忠四郎の姪、稲本マシとニコライの肉序、忠四郎の息子の名前からの類祖、鞆駈事件からの漢譯など、種々推多方法、揣摩をこらしたみに。

### 二

稲本斉一は、四代柴崎権三郎・ゆすの次男で、安政三年十一月二十八日の生まれ、妻は稲本利左衛門・はやの長せ、ちよう（安政五年六月三日生まれ）である。明治三十四年に長男胤氏（十和田靉光電鉄三代社長、銘通鴨正泉醸造元）より分家し、明治四十三年十二月五日死亡している。妻方よりは、大正八年に没し、相続人がない理由で絶家となっている。稲本の姓は新渡戸伝の三本木原用石に功があつたので賜つたといわれる。へ吉米地愛子談（新渡戸伝日記に出てくる稲本墨利左衛門が恐らくそれであろう）。

稲本斉一と角鹿忠四郎の關係は、忠四郎の孫、柴崎健一宅の系図によると、斉一は柴崎家では金太郎と呼ばれており、五代目柴崎権三郎（小太郎）の弟となっている。

新成岡では、忠四郎と斎一は兄弟のようにいわれているが、系図帳の中では叔父、甥の關係、すなわち、忠四郎は四代目権三郎（宇太吉）の弟となっており、甥より五下になつてゐる。この奥、野辺地役場の戸籍では正兄弟と思つてゐる。それにしても、五代叔三郎の養子が忠四郎の二男、國太郎であつたから、よしんば叔父、甥にせよ、従兄弟にせよ、兄弟同様だつたと言ふことができよう。

もろろん、ぞうは言つても、それ／＼個性の強い性格であつたろうし、当時危険視されたであろう主義主張にどの程度、共鳴しあつていたか問題と言へる。また逆に先覚者として生命を賭して主義に殉じたから、肉身の兄弟以上に親密であつたとも思われる。何れにしても想像の域を出ないが、私はそういうハンデを自覚して、この推論を進めていきたい。

馬口の柴崎家は、明治南化期に、渡乱期の商人らしく一攫千金のアンロションを持つてその身代を銀山経営で夫つたといわれている。斎一も鉉物標本を一杯持つており、洞内にレンガを焼く工場を建てたこともあり、新知であつたろう。そういう点も手固い生き方を身上とする姑と相容れまいわけである。このことは二人の老せも交々語つており、正と斎は斎藤さよ氏は手紙の中で、忠四郎もから心葛藤について次のように書いてゐる。

「忠四郎様は大変な勤弁家で、政治が好きで身代を無

くしたようだと話しています。丁度、私の母（斎一長女フジ）が十歳位の時、会いたいと翁本へ申しこんだところ、翁本の祖母（姑）はキカナイ人だつたようで、その頼も叶わずに貧苦の内に、心細く淋しく死んだことだらうと話しています。その時、母は魂に押さえつけられたと姉に知らせてあつたようです。その頃、カにする弟、私の祖父は、家業再興をはかつて忠四郎様と木盃を交して台湾に行つたと言つています。この辻途も空しく破れた隣れな兄弟の晩年を思い浮かべると、一入隣れに涙ぐむと姉は言つております。」

善家を飛び出した斎一は、その後、北海道の渡島郡森町で弁護士、代言人をしていふという。どういふ内容の事件か不明だが、白老の別当様（神主）の裁判沙汰を解決してやつたという話も語り伝えられてゐる。白老は噴火灣を獨り切つた対岸だつたから、交流は大いであつたと云らる。

厚志、姑、はやせは六ヶ所村の古村、平沼部落の「ハシパ」といふ家の出だといわれる。「ハシパ」は旧家で、同部落に多い橋本一族の純本家であり、栗南の豪家とままざま縁戚をもつてゐる。入戸の河内屋橋本家もその出であり、野辺地の飯田家、藤塚の小山田家などもさうである。

平沼部落は小川原湖、田面木沼とつながる高瀬川河岸に発達した小村で、千五も前から開けたといわれ、和船

時代は活気を帯びた村だった。しかし、昭和の現代でも冷害、高潮などと自然条件が酷薄で、パイロット事業など国や県の援助を必要としている地域であり、したがって百数十年前、その部落出身である姑が、忠四郎、斎一のような生き方に必死に抵抗したというのは充分に肯づけることである。

二人の老母がその母（田中没）から聞いた柴崎家は野辺地まわりの豪商で、海にすわりと並んだ白壁の由緒屋号は、野辺地灣の沖からも際立つてゐたという。往時、野辺地は殷賑を極めた港町だったのだ、巫館との関係も極めて深く、柴崎の親戚でもドイツ留学をして夫婦共に著名な眼科医だった藤野病院やマルヒラと呼ばれ、日支貿易で巨万の富を得た一族も末玄町にあり、華族から嫁を貰ったりしていた。

斎一は東興義塾のオ一回卒業主といわれている。稻本家へ養子に入る線は、向が葉の商いに三本木へ来たのが取り持ったといわれるが、福沢門下の啓蒙主義者たちに学んだ新知識の斎一と商家の紐帯、発展を一緒に考えている姑とは肌合いが合わなかったらしい。そのため長セフジが三才の丑——明治十九年頃——養家を飛び出したのである。それから十五年向、台湾や北海道など新天地の流浪の旅を続け、没落した商家の再建——その他いろいろの理由があつたろうが——をはかつて、結局失敗に終わったのである。この向の軌轢が明治三十四年の分家と

からんでゐるのだろう。

姑との対立はその後も続いたらしく、長セフジの教育について、本人が東京のニコライの所へ行って洋裁を習いたい旨申し出たところ、斎一は本人に任せだが、祖母は絶対反対でとう／＼駄目にまわったという。（芭米地愛子談）

ところで、このニコライ云々の話は極めて重要な鍵を持つてゐるのである。全く謎に包まれている芭米忠四郎の思想内容を知る唯一の手がかりともいえるほどのものである。

### 三

ニコライ（一八三六——一九一三）は、文久元年（一八六一）に、函館のロシア領事館付司祭として来日し、ギリシヤ正教の布教活動を行ない、沢辺孫磨を日本最初の司祭としたが、この沢辺が明治元年、早くも入戸にまわっており、明治七、八年頃には市内一帯で布教を行ない、その実をあげてゐる。そしてその勢いは郡部にも広がっており、明治七年三月十七日、三戸のオ十七中学区取締松尾紋左衛門、北村礼次郎から提出された「コマン警戒ニ係ル建言」（青森県史七）：附一によると「今般衆教之行はれ候も、是全く内教不番が故也。具社中を見ルニ多クは、破産道ヲ失に候者、或は固辭友を失に候者也。」と一つの実態を明らかにしている。ここでもキリスト教は

生活にあえぐ階層の救いとしてあらわれ、仏教・神道は  
馬世、人心に無力なことを示している。

「建言」はさらに具體的に布教の模様をのべ、先月、  
箱館教会副議長大田詰謙吾、此元江参候節、七戸ニ而杉  
厚某、外二山与と申者同人江南社申入候得とも其人物採用不致  
由」と各地の動きが報じられている。

この文中に出てくる、七戸の杉厚某や山与とはどうい  
う人物であるか不明だが、少くとも既に草深い南部厚野  
に南化のルートが設けられていることが判然とするわけ  
であり、当然、野辺地や三本木、藤坂らの宿にも何らか  
の影響がもたらしたと見てよいだろう。一方、この書面にも  
出ているように、異教の進出に対して『皇國の一事件』  
として彈圧が加えられているのである。

五戸の藤田貢については、孫の貢一氏の記憶によると、  
幕末に京、大阪で前部藩の隠密的役柄についており、新  
選地などもよく知っており、虎藩置東後は五戸にこもつ  
てウルクシ業などしていたが、殆ど無賑のまゝ晩年を過ご  
し、明治四十三五頃、八十三文の高令で亡くなられたら  
しい。教会設立の件は貢一氏には全くの初耳だそうであ  
るが、計算すると、教会問題の時は四十六の壮年、分別  
盛りであり、決して、一時の氣まぐれではなかつたと思  
う。時代転換の足場をギリシア正教に求めたとみてよい  
のではなからうか。

入戸地区のギリシヤ正教受容者の名簿の一部が『北奥  
羽の現勢』一冊(4)に出ているが、士族や医師など知識  
人層が圧倒的に多く、しかも晩年まで教義を守った人が  
多かつた。

明治十四、五年頃の青森県キリスト教の動向について  
『基督教新聞』(明治20、8、3)は教報として紹介し、  
特に弘前教会の地位を高く評価している。その特色は「  
此地の信者へ大抵戸主にして金満家多きを以て独立自給  
の教会と見るの見込ある」ことであり、この点、奥南地  
方の場合と多少趣きを異にしているといえよう。

また青森教会については「青森へ東奥ノ一湊にして北  
海道へ渡る要地たり、且つ奥州管所のある所なり、我が  
美似美教会よりは去る明治十二年を以て伝道に着手せし  
も種々の困難に因て暫く中絶せしが明治十六、五年再び伝道  
に着手し同十九年より廿年に至ては漸く進歩の景状を呈  
し、衆多の信者を加え、管所に奥州に中學校に道を求むる  
者大に起り多望する良園と見るに至れり、此地より伝道  
すべき良地は小湊、野辺地等なり」とその橋頭堡的位置  
を確認し、また「陸奥七戸、北海道の新都は伝道上の要  
地見るが故に將來伝道者を送らざるべからず」とあり、  
野辺地、七戸、五戸、入戸が新文化伝播、浸透の拠点と  
目されていたことがわかる。

もろろん、キリスト教の活動は政治情勢や政治思想と  
眞實のものではあるが、明治社会の開明度と切り離せば

い関係にあることも事実である。入戸の自由民権派の総  
師、源蔵はニコライの直弟子であり、奥南の自由民権運  
動の枢軸であり、再鹿忠四郎が活躍した驪駒事件（庫馬  
組合事件）は源蔵の登場によつて新局面をむかへ、入戸  
派（土曜会）のリーダーシップが確立したのであり、この  
際、特に注意すべきは、この源と自由党左派のリーダー、  
大井憲太郎とが、ギリシア正教徒という関係からか、非  
常に近い関係にあつて、後年、南春茂（後の入戸町長）  
などを大井の所へつかわしているという事実である。

ところで、稻本フジの口から彼らは、南春茂や素須川  
光宝（後の代議士、土曜会の指導者）らの名前をよく聞  
かされていたというが、このことは再鹿忠四郎、稻本育  
一の政治路線を伝えるものではなからうか。しかも育一  
長セフシがニコライの所へ行つて孝ふという話題で家  
内に一つの紛擾が生じたということも、ニコライを校と  
して綱目の存在を物語つていよう。

青森県官療派の巨頭、寺井純司は士族であり、かつ代  
言人であり、明治十五年から三十二年までの七期の県議  
生活をし、議長も勤め、最後は政友会代議士を二期勤め  
た改進黨の総師であるが、彼も津軽藩校、楯古館に皇漢  
前学を学び、さらに藩費でニコライから語学を学び、そ  
して福沢諭吉の慶応義塾で英語を修め、明治五年、東奥  
義塾一尋教授に任り、代言人の資格を得た経歴を持つて  
いる。この寺井の歩んだ道も再鹿忠四郎を知る一つの手

がかりになるのではなからうか。

#### 四

再鹿忠四郎が自由民権運動に参加した契機は全く不明  
である。稻本育一が東奥義塾の初期の出身であつたこと  
れば、当然に菊池九郎、本多庸一らと南文（共同社）  
グループと何らかのつながりがあつただろう。

また、私の推定のように、大井憲太郎の「明法社」で  
法学を学んでいたとしたら、自由民権運動に参加する契  
機はより強いわけである。

明治十二年十月廿三日の「朝野新聞」によると「大井  
憲太郎氏の開設されし明法学舎は去る十八日議に由校し、  
三日間に生徒をも退校せしめられたるよし」とあり、几  
耳から始まつた大井らの法曹教育が中止されたことが報  
じられているが、その閉鎖に到るまでの事情に何かニュ  
ースベリユーがあつたのだろうか。反面、その存在も有  
名であつたのだろう。

大井は元走院退官後、曙新聞の記者になり、福沢諭吉、  
中江兆氏に任りつて私立法律学校「誦法学舎」を明治十  
年に興した。講師はフランス等の大井と眞作麟祥、松岡  
正文、英等は平陽卓哉、独逸等は北島道彦、小松育法、  
明清津は岡松寛谷であつた。しかし明治十年、大井と北  
島が衝突し、大井は新任に「明法学舎」を創立し、法律  
原書でもって法学生を教えながら、かたわら裁判の代書

の弁護事務をしていた。この時代は代言人自身、自由民権の伸張を主張し、民選議院の開設を要求する政談漢説をさかんに行ない、藩閥政府の打倒を主張していた。

大井に關して重大なことは、彼が幕末、長崎に留學している時に、ギリシヤ正教に入信している事實である。平野義太郎の『大井憲太郎』(吉川弘文館、昭和)はこの裏について余り解れていないので、私としても入信の事實以上のことはわからぬのであるが、ギリシヤ正教が東南にいち早く伝道されたことや前述のように源景と大井の連絡のことなどを考えてみれば、大井とギリシヤ正教との關係は青森県の自由民権運動に何らかの影響をもつものと思われるのである。

また、平野氏は大井が源太郎から憲太郎に改名したことを「折柄、著作麟祥は *Conversion* を記して日本ではじめて『憲法』の文字を創意した」と題意せよるとき、憲太郎の憲こそ、この憲法の制定を翹望する念願を名のうちに念じこんだとみられる。「(憲)と解しているが、私も、忠四郎が二男——明治十七丑まれ——に『國太郎』と名づけ、長男に『孝六』(大井憲太郎の幼名)と名づけ正心理を同様に見たい。

大井の思想の中にある國權意識や使命感は角鹿忠四郎の中にも感情移入され(アジア・日本・列強の關係を条約改正問題の中で鋭くみつめていた野辺地町の野坂五郎も同じ仲間であつたらう)二男にもかかわらず國太郎

と愛児に名づけるほどに昂ぶっていたのである。

角鹿忠四郎が代言人であつたかどうかは目下のところ、そのいづれとも決定づける資料を欠くが、韃靼事件で、七組委員中、最若年者ながら、野辺地組代表委員の資格でもつて縱横に活躍した事實こそが、彼が農民を守る代言人であつたことを雄弁に物語っているといえよう。事件は裁判沙汰に帰つたわけであるが、恐らく法廷斗争、法廷技術の面においては源景と共同作戦を討て、猛烈な官権側の彈圧に屈せず、結局、人民派を勝利に導いて行つたという実績は、確かに大井門下としての名を恥ずかしめないものと言つてよい。

明治四年、青森蓮心寺に東奥義塾英学部が開かれた。稻本育一がここで学んだとすれば、一教下の忠四郎もやはりここで学んだことだろう。馬内から青森へは陸路といい、海路といい極めて交通の便が充實しているし、商業圏でも統合されているのである。

義塾で一庵のガイダンスを受けた忠四郎は上京して大井門下になつたと思われるが、忠四郎と大井を結びつけたものは、より直接的には義塾の教師でニコライに学んでいた前記の寺井純司ではなかつたらうか。後年、寺井の改進黨は上北郡に大勢力を枝植するが、その人的なつながりは既に明治初年からあつたものとみてよく、再鹿(柴崎)忠四郎の身の振り方についても、柴崎家の相談に与かつて同じニコライ、ギリシヤ正教の仲間の大井

を紹介したものと考える。

当時、源最もニコライの門におつたのであり、逆に考へると、源晟を驍騎事件に引き出したのは角鹿忠四郎に  
つたのではないかと考へられる。

なお東奥義塾で、角鹿らに大きな影響を与えたと思わ  
れる人物に榊茂洋がいた。

榊は東奥義塾創立に深く関係し、寮監も勤めたが、後  
に東京に出て法律を修め、司法官となり、弁護士生活を  
もあつて、明治二十一年頃より政界に入り県会議長、  
代議士となつて、一主六十余年を郷党のために捧げ、憲  
政自治の發達に功勞して、敢て一身の榮辱を顧みなかつ  
たと讃えられている。この榊茂洋の生き方が、稲本春  
一、角鹿忠四郎に大きな影響を与えたことは争われぬ事  
実であろう。

## 五

明治期の明治青年が、斬らしい生き方を求めて、法律  
や政治、経済を学ぶため出京していく姿は、津軽、南部、  
斗南といわずに多く見られたのであり、それはまた士族、  
豪農、豪商の子弟の別も向わなかつた。

入戸では神童といわれた野田正太郎少年が福沢塾で盛  
名を馳せ、彼の室は大芦梧桐、鳥谷部春汀ら樹勅たるア  
ンビションに燃える南部青年の溜り場となり、五戸から  
は中市稻太郎と従兄弟の鳥谷部健之助が中村敬宇の同人

社で屈望され、榊引弓人また福沢塾に身を寄せ、ナシヨ  
ナルのリーター一冊を片手に北米の新天地目指して勇躍  
出発していた。鳥谷部健之助が父の死去のため孝半ばに  
して帰途につくと、入れかわり、南部町植内の士族、村  
木晋三は三戸郡下郷外十一校の小等講習の旗を掲げら  
れて、明治十六年五月同人社の門をくぐつたのである。彼  
については、北村鳥城の『三戸志』には次のように書  
いている。「其銳意永く郷里の小天地に躊躇するを許さ  
ず（略）宿望たる海外遊学の志を遂げんと欲し、其資を  
得んが爲め去て北海道小樽に赴き、亦子弟の教育に従事  
す。留まること三耳、家嚴固く遠征を許さざるを以て、  
遂に外遊の志を絶つ。明治二十三年、帝國議會新に開け、  
野村治三郎氏貴族院議員と爲るに及びて、囑を受けて其  
顧問役となる。是より以後或は東都に在り或は郷里に帰  
り、漸く交りを政界の名士に結び、屢々論客の会合に與  
かる。孝才兼ね備わり立論卓抜、文を統する流麗、先輩  
後輩皆相服し、他日地方の先鞭と爲り風雲を叱咤すべき  
を期したるのであるが、病のため、明治三十二年東京の  
寓舎で没した。三十六歳の若さであつた。

村木晋三の影響を最も強く受けし人物に、同じ租内村  
出身の吳業家、沼畑忠治がある。彼の回顧録によると、  
年少、軍人を希望していた彼の前に現われて、そのコー  
スを転換せしめたのは、実に同人社帰りの村木晋三であ  
つたことが書かれている。それから、注目にあてえする

ことは徳富蘇峰の平民主義の影響がこの僻隅の地にも及んでゐることである。彼は次の如くいう。「小學校時代ニハ師ノ教化ニ依リテ只音非凡ノ人物ヲテシテコトヲ目的トシ、是ヲ遠ゼン爲メニハ非凡ノ人物ニ接觸スルニ若カザルヲ信ジタリ、初メ先輩村木香三氏ノ教化ニ浴シタルコト多シトモ少少の時を語り、更に「村木香三氏亦同人社ニ強固ノ功成リ錦ヲ故郷ニ飾ルト共ニ聲名曠々マリ、乃チ村木氏ニ英語ヲ學ブ。時に明治二十年ノ初頭ナリ、村木氏ハ地方新知識ノ魁ナリ、地方ノ教育家、政治家、名士皆刺ラ氏ニ通ゼザルキナシ、爲メニ此等人士ノ談議論說ヲ聴クノ好機ヲ得タリ、加、ルニ徳富蘇峰氏ヲ對面シ又友ヲ発行シ一種ノ文体ヲ以テ巧ニ平民主義ヲ呼ビザルニ會シ、彼此相俟ツテ思想ノ變化ヲ乘シ、目的ハ甲人ヲミリテ政治、実業ニ移リ渡米ノ企画ヲ爲スニ至リシト明治青年の夢みたコースを語つていた。そして、このコースを一応実現したのが、柳引弓人や平野勇造、それに野田正太郎であり、夢に破れたのが中市一朗、稻本奇一、それに角鹿忠四郎らであつたといえよう。

ここで、角鹿忠四郎と最も近い関係にあつたにたろうと思われる平野勇造に多少触れておこう。徳富蘇峰の「大畑町誌」一、昭和、才四版」によると、「明治十四年の頃、澤野嶺の名にて書を元老院に送り、志を披瀝して推輓を請ふた者があつた。石書状は差出地の野辺地警察署へ返送されて、差出人を取訊ねられたが、警察とは立五二の手代、当時十八才の堺勇造氏であつた。一手代の身分にて元老院に上書したと云ふことは、物堅い高家の皮に叶はぬこと、主人から痛く戒しめられた。然るに氏の志は田舎の小商人ではなく、他日大いに期する処があつたので、主家を退き庵を築して東京に出た。

東京に出て見ると、苟くも志を他日に伸べやうとする輩は、比々として皆洋行して居る。依つて氏も洋行を企て、四方に奔走して漸く旅費を調達し、明治十八年米國に渡航した。最初は政治家を志したが、渡米後、政治は才ニにして、先づ実業家であるべきであると考え直した。萩錦の血流ひなどを勵きながら苦學し、彼の武藤山治や和田豊治などは、何れも米國苦學時代の朋輩であつた。在米四ヶ年、専ら建築等を研究して帰朝した。「略し「一鳴」この後、彼はその技術を見込まれて平野家の養子と成り、三井物産に入社して活躍したのである。

この平野勇造の歩んだコースを角鹿忠四郎も夢みていたのではなからうか、そして忠四郎の場合、栗粟のしがらみの中に是をとられ、遂に激浪の中に没したとみてよいにたろう。

平野勇造の勤めていた立五二、野村新八郎家こそ、博覧會王、柳引弓人の母の家であり、弓人自身も明治十八年頃渡米して、武藤山治や和田豊治らと苦闘してゐるのである。つまり、柳引弓人と平野勇造は全く同じ頂ア×リカに渡り、共通の仲間をもつていたということには、二

人が手を組んでいたとも言えるのである。ここでいえることは、渡米出来た二人には、すべてを捨て、集中し、踏み切れる強さや自由があつたのだが、再鹿忠四郎の場合、既に生家は没落しており、再鹿家の養子という立場にあり、二児を爲した美しい妻が存在している。ある意味で囚われに存在するのである。忠四郎は恐らく理想主義的、汚闘直アツと思われるので——これは二男国太郎の人格、経歴から類推出来る——それだけに理念、アンビションと現実の間の隔りにさいふまれ、人間的にも分裂し、徹底し厚い。矛盾し生活がりが続き、従つて恐らくは毒々その養家から愛想がしさをされたのだと思う。

## 六

再鹿忠四郎は、新時代をまきぬこうとする商家の出であるから、近代商法、会社法など資本主義社会必須の法律の學習に身を入れてたであらうし、養家とて大いに期待したことだろう。しかし忠四郎の野心、意欲は野辺地の長老達の思惑を越えるものであつた。

私は再鹿忠四郎が大井憲太郎に深く心酔していた証拠として、彼の長子の彦彦六郎命名を強調したい。大井の幼名彦彦六郎を拜借したとみるのである。この辺が再鹿忠四郎のバツションノート厚性格をある程度示していると思う。このことはフィクションといえるが、私は蓋然性を描けしうると思う。

彦彦六は、明治十三年三月廿七日、三戸郡五戸町五拾番戸を本籍として生まれ、明治廿六年四月一日、忠四郎死去後の再鹿家の家督相続を行なつてゐる。忠四郎は明治二十五年二月二日に死んでおり、相続までの一年間の空白は恐らく一族間の意志の統一にかつたのであろう。忠四郎の妻きゑは既に二十二年五月に離縁に行つてゐる。かかる点忠四郎死去後の相続問題は複雑を極めたであろう。彦彦六の死亡は明治三十二年十二月十四日午前十一時四十五分、北海道敢架郡有戸村、酒彦千場参善地においてである。

所で私は前マから、長男でありながら彦彦六という命名を一寸解せぬと思つていたが、恐らくは襲名かまたは祖父かにいわれあるのを受け名と思つていた。しかし縁戚からはそのような話も聞かず、また二男に国太郎と名づけた忠四郎であれば、自分の尊業おくあはわざる大井憲太郎の幼名の彦彦六を頂いたと考えてよいではなからうか。

次に国太郎と名づけたことは、柴崎家で元孫に小太郎、全太郎と命名している事実から、お母がち不思議でないともいえるが、しかし私は国太郎は憲太郎と共通する理念を感ずるし、特に明治十七年という時局での日本の自由民権運動のおかれてゐる状況、自由民権論者の心情を考えれば、特に大阪事件を目前に控えた大井一派のナシヨナリズムの一つの表明と考へることが出来よう。

國太郎の名が高人の子としてふさわしいものであつたことは、異父弟の藤田在一氏も語っており、至徳徒弟時代は千次郎という通称であつたと話していた。

角鹿忠四郎と大井憲太郎の間を取り持つ人物に岩手県種族の指導者、鈴木舎定や鶴飼節郎がある。三戸地方の自由民権運動は鶴飼らの遊説により初まつたのであるが、旧盛岡藩領として、当然にその影響は、五戸、七戸、野辺地に及ぶのであり、また、忠四郎の死没地が盛岡と云えられていることも、盛岡の自由民権派と交流が深く、寺まで盛岡であつたとすれば最後は盛岡に居を構えていたということに尽ころう。鈴木舎定は自由党左派の領袖であり、加波山事件の陰の人物といわれ、大井は鈴木と組んで「東北有志の団体を糾合し、革命軍の先鞭をつけた」として失敗したといきまづがある。

明治十七年以降の自由党の激発事件の失敗、特に大井の大坂事件の失敗は、忠四郎にも大きな気落ちをもたらしたとする。よしんば驍騎事件の訴訟が有利に解決したとしても、最早それは本源的な兵びにりえなかつた。自由民権運動の夢に破れ、家庭も危殆に瀕し、人生全般に於いて絶望的に暮つていた明治二十年五月に孝三子、賢三が生まれた。忠四郎は子が二度と自分の轍を踏まざらぬといふ思いのこみの上に如世の術を働くおれと祈念したのである。

このように私は、角鹿忠四郎が、明治十四年の阪駒争

件当初の活動後、全く消息不明になる原因を、大井らの自由党左派に組していたためと考える。そのため養家や穂健は郷党に容れられぬで世帯に去つていたのであり、たま／＼三本木の宿本家へ来て、これが原因で宿本家は面会を謝絶したものである。つまり危険人物視され、青森県の人脈から隔離されてしまつたのではなからうか。

七

所で、角鹿忠四郎の養家、美濃屋、角鹿吉兵衛家とはどういふ家なのであるか。野辺地郷土史資料(上)によると、美濃屋は越前、敦賀の出身らしく、その地の寺に関連した記事が出てくる。恐らくは北前船の仲間にあつたであろうが、始めは下北の川内に住み、幕末頃、野辺地に定住したようである。同船同屋、醸造業を兼ねており、資料には嘉永四年の親音丸遊覧の補証文が出てくる。嘉永三年の酒屋の記録では、吉六、善兵衛、勘左工門の三軒の酒屋が存在しているが、三十年後の明治十五年の酒屋仲間約定規則には野坂勘兵衛門、角鹿吉兵衛、野坂藤太郎、川村福四郎、野利治三郎、西垣善兵衛、島谷清四郎、五十嵐清次郎の入人の名があげられている。美濃屋の規模は、明治十二年にユカニ十一ヶであり、玄米丸石五斗七升一合、糶玄米三石八斗八十、清酒二百八石となっている。当時としては、奥南有志の酒屋家である。明治十年頃よりど／＼土地を買入れ、十三年のイン

フレ―期には、長下半の開墾を再鹿良石工内と組んで一  
万円の資本で行なっている。有戸のひばり牧場もその一  
環であつた。

野辺地の再鹿一族は、この商家美濃屋系と前記、士族  
の再鹿良石衛門家系とがある。再鹿良石工内は天保六年  
の生まれ、明治三十五年、六十八歳で没している。父種  
右衛門、美濃屋とは血縁のつながらぬ関係にあつたが、良  
石工内の長男池田郎の妻、やすは再鹿忠田郎の妻さぶの  
姪、つまり兄、吉兵衛の二女である。また良石工内の良  
妻は八戸の神土真宗の寺、本覚寺、広田家のおでであり、  
この広田家からは五戸の藤田重蔵へ中市稲太郎の妻さよ  
の姉の妻も出ており、八戸、五戸、野辺地の人脈の一  
環をなしている。

再鹿良石工内は、明治十二年の府県会規則才一回議員  
として当選、連続二期、その後、府県制が実施されてか  
らも果議をつとめ、その間、村長、町長をつとめ、町勢  
の発展の基を作つた人物である。党派は改進黨系である  
が、一時期、自由党に転じたこともある。

明治十二年九月から十三年一月の間に再鹿忠田郎が産  
馬共会委員として、野辺地組から飯田記代七と二人選ば  
れた時の顔ぶれを見ると、七戸は山田改一、工藤徹郎、  
五戸は藤田善五郎、藤田重蔵、八戸は岩泉正意、新宮興  
連、田子は尾形及四郎、三戸は諏訪内甚蔵であり、馬籍  
係は野辺地が野坂英次郎、五戸が江渡又作、八戸が大沢

多門であつた。

この顔ぶれを見ると、全くその地の代表的人物ばかり  
である。山田は当時五十歳に近いが、西郷隆盛にも近い  
といわれ、七戸さぶつての政治家であり、当時既に果議の  
職にあつて、以後四期も続けた。野村治三郎とも縁戚関  
係があり、地方では革新的思想の持ち主といわれている  
た。工藤は三十二歳、既に各小区の戸長を長く勤め、委  
員着任直後、果議生活に入り、改進黨に属して衆議院選  
挙にも出馬している。彼は七戸の実力者であつた。五戸  
の藤田善五郎は四十六才、名譽藤武の分家であり、当時  
既に果議であつた。八戸の岩泉正意も三十九才、果会副  
議長の職にあり、八戸藩時代からの名望者であつた。田  
子の尾形及四郎も四十二才、向もなく果議生活に入り、  
四期を勤め、田子の初代町長も勤め、豪奴らしい落、然も  
企画性あり、典型的な政治家といわれ、議員としても一  
頭地を抜いていた。〔青森果議会史才一卷〕特に同  
僚の飯田記代七は新渡戸伝の所に「及び顔を見せてい  
る人物で、幕末、明治初年は野辺地の総馬改め役であつ  
て五戸の藤田重蔵と朋輩であり、十三年の年令は不明で  
あるが、四十歳前後の町方実力者であつたろう。この他  
の各組委員や馬籍係にしても、いずれも当時、既に、ま  
たは後年、政治、経済界に目覚ましい活躍をする人物ば  
かりである。この奥、野辺地組だけがオノ流の人物を選  
ぶ筈はないのである。当時の野辺地の果會議員は、再鹿

長石徳内と、立鼓一。野村治三郎、次いで「立鼓ニ」の野村和八郎（野坂年次兵江二男）という鋒々たるメンバ―に付た。そしてこの構成をみると、角鹿、野村の豪商たちが明らかなに野田地を牛耳っていることがわかるのであり、囑望されて所蔵一門に列しながら、かかるエリート層の路線からそれを角鹿忠四郎には何か決定的な原因が与ったように思われる。

豊族の内で細々ながらも代議士になったそうだと、信承が残され、また忠四郎と同世代の角鹿吉兵衛へ書き添の垣、のねの養子、七戸の盛田岳正治の弟が政治狂いとなり今でもいわれていることと盛田家を中興した盛田院盛田岳平治と比較される吉兵衛は公的の事業にまで自分の私財を投入したため、美濃屋の遺産も夫存われてしまったという。（盛田産三翁談）などを思いあわせてみると、忠四郎の存在がもたらした影響は極めて大きかったといわねばなるまい。

## 八

県南自由民権運動の特色は、地区の指導者たちが二代の若者たちに対して指導力をもっていたということである。八戸の土曜会にしても次のような年内情にあった。

明治二十三年刊の平屋忠香の『向鶴』の描写によると、土曜会は「八戸所産町三事務ヲ置キ、会員百名以上、

多ク天保生まれノ大人ニシテ、県会議員、村長殿、田舎大尽様方、町家の旦那衆ナリ、主義目的ハ地方公共ノ利益ヲ計ルニアリト云ヘバ無論政社ト思ハルレド」要するに余裕ある人向共の道楽的なものとみられている。

当時、文明開化の東京においては、天保生まれは、古物の代表と見なされているのだが、八戸の土曜会の指導者は天保生まれの大人なのである。これに対して東奥義塾の自由民権派の中核となつた青年たちは安政以降の生まれで、八戸土曜会の指導者とは二十年余の年令差をもの。しかも、この二十年の中に明治維新という決定的な亀裂が存在している。角鹿忠四郎はこの亀裂の中に吞込まれたといえよう。

ちなみに、角鹿忠四郎に類似したイメージをもつ北奥の人物として、秋田県の自由民権論者、山本庄司、柴田浅五郎に少し触れてみよう。山本は山本郡富根村の豪家の生まれで勉強のため上京、東京で新しい政治の空気をたのびり吸って帰郷し、たたちに北羽連合会を組織した。

その翌年の一八八〇年、土佐の立志者の流れをくみ、北羽連合会と異なつて主として下層農民や軽董士族を会員とした柴田浅五郎の秋田立志会が結成された。このクルーはそれだけに一面、世直しの变革性をもつていたと同時に、他面ではドン・キホーテ的荒削性と指導者たちの多ヲ幹ぶり、目につくようになった。柴田は嘉永四

(または六)年生まれで、母は夢家の出で、嫁入りの時は美しい布で着飾りなどした乗り掛け馬で輿入れしたといつて評判になつたほどで、中農以上に属していたといわれる。(『日本の百年』より)

角鹿きよぶが忠四郎の許へ嫁いで来たときにもお付き女中を連れて豪勢者のものであつたし(きよぶは再婚でも女中を連れて歩いた)、その伯母の場合の嫁入り行列は、絵草子にも描かれ、函館かどこかの図書館に納められている筈も伝わっている。東京帰りの新知識、柴崎忠四郎と南部二十四万石の玄圃口、野辺地さつての豪商、カキキの一人娘との組交あれば新時代への洋々たる船出と期されたであらう。

しかし『秋田立志会暴動記』に登場してくる戸巻駒吉の阿が物語るように、自由民権運動の高揚期が過ぎ去つたあとの家庭生活の荒廃は避けられなかつたであらう。駒吉は十六歳の時、嫁見に行くに金のヨリで髪を結い、田舎にはめずらしい蛇の目傘を持っていつたほどの派手好きの進歩的な人間であり、明治十二、三年頃はその家に毎晩の如く同志が集まつたのであつた。士族、農家、職人と色とりどりの階級だが、やがては地主か武士にならうといふ書雲の夢を抱く面々であるから、まさに天を呑むといふ意気だつた。羽織や袴をつける者、陣羽織を着るものまであつて、瞬には土百姓、町人であつても取差一本打

ち込んで天下の志士気取りであつたが、人目をばかると密会であるから、夕闇時に集り、徹夜で談じ、明けがた近くになつて解散した。その都度酒食の饗応があつたので、戸巻の家はために産を傾けたのであつた。もちろん、角鹿忠四郎の場合、このようになんせんす刺であつたとは思われないが、相当に類似した点もあつたことであらう。それは五戸町を中心にした何の士族復讐運動を多ればわかることである。

## 九

角鹿忠四郎の没年は明治二十五年二月五日であるから、丁丑三十五歳の壮年である。病因は熱病といわれ、國太郎の養母、柴崎てるの語として伝えられているところでは、没地は盛岡といわれている。現在、位牌は、野辺地町海中寺(浄土真宗)にあり、同寺の話でも、戒名一騎雲院義山俠丈居士から推して、やはり他寺から転葬されたものがらうといっている。生前の功績に対して、三戸か五戸かに石礫があると國太郎もいつていたそうであるが、その真否も不明である。

忠四郎の遺族は、現在、青森市矢作に住んでいるが、忠四郎についての話は、國太郎が息子、健一に妻に語つた思ひ出話と、マルゴのバア様と云われる國太郎の妻の姉(工藤行幹の妹の娘、明治23年生まれ)の思ひ出話があ

るだけである。

柴崎家の過去に依ると、忠四郎の母は青森市野内の  
医師、十葉良雲（当時野辺地住）の長女虎和である。忠  
四郎四才の秋、安政七庚申年十月、徳四郎は新町掛屋祿  
を譲つてもらつて、<sup>④</sup>家を創立した。掛屋はもちろん、  
幕府や諸藩の公金出納を担当した町人のことであつて、  
野辺地の有力商人であつた。<sup>⑤</sup>柴崎家も、南部藩掛屋  
御用をのめていたのだから。この掛屋祿を分家の<sup>⑥</sup>に  
譲つたというのはノレン分けのことか、業務移管のこと  
であるか、または祿といふのは株の誤記か、不明である  
が、とも角、忠四郎父徳四郎も相当な人物だつたのである  
う。

忠四郎の兄警作は安政二年、母親貞和十六才の時の子  
供で、忠四郎は二年後、長女は不明だが二女みきは明治  
二年、きわが三十才の時の子供である。徳四郎の生没は  
不明であるが妻が天保十年（一八一九）生まれだから、  
余り年令が違わない天保生まれだろうと思ふ。徳四郎と  
その死守太吉、つまり四代目権三郎とも年令は余り違わ  
なかつただろう。なぜなら、四代目の二男、金太郎（稻  
本育一）と忠四郎とは一の歳いで、しかも四年間同じ屋  
根の下で生活したこと、父親同志がそんなに年  
が違わなく、<sup>（一）</sup>家長が健在であつたことを意味する。また、  
育一、忠四郎が非常に仲良かったといふことは、こゝにい

う生活に基くものであつて、特別なものでもあつた。そ  
れはまた、この従兄弟同志の仲だけでなく、五代目権三  
郎、つまり育一の兄、小太郎との血もそうであつたと考  
へるによく、この叔父が結局、忠四郎の養父、国太郎を  
引き取るわけである。彼は明治二十八年に死んだが大酒  
のために胃潰瘍をおこし、血を吐きながら、なお飲み、  
息を引きとるまで、その血をまぐさい胸に国太郎を抱い  
て寝たので、なまぐささに降参したと国太郎はよく語し  
ていたといふ。

忠四郎は野辺地の人間であるが、戸籍上の本籍地は五  
戸町五十三番地（戸）にある。長男彦六は明治十三年三  
月廿七日生、二男国太郎は明治十七年一月十七日生、三  
男賢三は明治二十年五月六日生まれである。ところが、  
妻きよとは明治二十二年五月十八日に離婚している。そ  
の原因については、忠四郎が野辺地——五戸——東京と  
余りに国事にばかり没頭して家に居つたがために、  
妻が不満を持ち忠四郎と縁を切つたとか、きよが小柄で  
非常に綺麗であつたが、又面、豪商の娘なので、我儘で  
贅沢であつたため家内がおさまらなかつたといふ話が残  
つてゐる。この点、今日ではどちらが非なりと簡単にき  
めつけることはできない。同じことは中市稻太郎の妻き  
よについてもいえることで、いふならば新時代誕生のた  
めの犠牲といえよう。

忠四郎妻きゑが、その後歩んだ直は、まさに波瀾万丈の人生であった。晩年、盲目と存ったがバシヨのババチへの愛祿で、子や孫に囲まれて八十余才の長寿を全うしたということ、五百沢兵衛、きゑの二女今井千ヨウ氏が教示してくれた。

今井氏の手紙によると「きゑは目が全く不自由になつても感性がすぐれ、退屈しのぎに日本紙裏打ちなどして、布で煙草入れ、させる入れ等を針でもって縫製し、近所の耳寄りに誰彼となく惜しげもなくくわては呉られ、自身も満足していました。またその作品を見た人は盲人が作ったことを聞いて驚かぬ人はなかつたことは事実でありました。歌舞伎、義太夫が好きで、その物語の中から源に話をしてくれました。大家に育つたからでしょう、かおちからかで応場な振舞いが多分であり、姿勢も正しい人でした。然し、息子らの訪れが時に少くなると呼びつけて、たしなめるような一面もありました。」とその入柄の一面を伝え、その他一族、縁者にまつわる立ち入った話も書いてよこしました。手紙は親子の情愛に満ちた、読む人をして感動せしめずにはおかない内容であり、きゑの前半生の波瀾とはうけて代つた後半生の平安さに、私自身すら救われた感を覚えた。

忠四郎ときゑの向の長男、彦六については「彦向は郵便配達をし、夜尙勉学に励み、樺太に行ったこともある

由、無理がたり身体をこわして歌葉に帰り、五百沢で病死した」と書いている。彦六は最後まで商賈性だったが、母の生家からの積極的援助はなく、国太郎の苦難の歩みと同じく、むしろ年上であつたからそれ以上に自立を強いられるが、またはその気持が強かつたのではなかつたか。三男賢三については「通信関係の勉学に励んだが五百沢家で病死」とあり、薄幸存若者に一厘の涙を禁じえぬ。

所で、明治三十六年六月二十八日、救への廿歳になつた国太郎は、三十二年、彦六死亡後、絶家になつていた再産家の再興を、五戸村役場の江渡種助（自由党県議）村長に届けており、しかも二か月後の八月二十日、今度は鹿家屈を提出している。この慌たしい動きは一体何を物語っているのだろうか。この時、国太郎の後見人になつたのは、三代目柴崎権三郎の妻タマの姉、きよの夫である山口又太郎（俳人山口鷺子）であつた。

## 十

明治三十六年の唐突な再建劇が、一体どんな理由によるものであるか不明である。しかし忠四郎の遺児に対する一連の取り扱いに、何かしら冷たいものを感ずるのは、結局忠四郎にたいして柴崎を除いた一族の人々が、余り好意を抱いて居かつた証拠だと思ふ。陰の話では、国太

から再鹿家に相当の遺産があるものと思つてはたごころ、  
位牌一つで追い出されたとかで、鶯子を快く思つていほか  
うにぞうである。山口家は当時、北海道への玄関口であ  
る野辺地で繁盛した料亭であつた。鶯子の妻の生家、賣家  
も福屋に居た。さよ、タマの祖父は五戸の大直、高橋直  
吉からきいて居た。大直家は中馬総改め所と称して、旧  
藩時代、大いに巾をきかした本陣宿であつた。明治二十  
八年二月五日の東奥日報の記事に、エンブリの舐れ頭、  
高橋直太郎が当地方の若者頭へ手紙を送つてその復活、  
振興、保存を囑へたことが載つて居る。伝統芸能のペト  
ロンの立場にあつたのだらう。

一方、野辺地の豪商間には上方文化の影響が濃く、浜  
平清藏氏の「野辺地繁盛記」(「玄報」のへじ、卯月号)の一  
節によると「商売上の交流や京阪方面の流行、嗜好、文  
化なども伝えられて、歌、俳諧、謡、歌舞伎、義太夫、  
お茶りの祇園はやしや毎朝のお茶がゆなども当時の名残  
としてある。俳句や謡なども、五戸あたりとも交流があり、  
鼓や太鼓を入れた謡や、はやしの会を開いた記録をしは  
しば見受け、昔の風流も憶はれる。」とあり、冬豪商が  
それ／＼雅号をもつて居ることも紹介されている。

われ／＼は、再鹿忠四郎を考へる場合、単に明治の啓  
蒙的側面ばかりでなく、江戸商人的面も考へなければな  
らぬ。五百次ぎ原について娘ちようが語つて居ること

はまさに江戸商人的教養にほかなりぬ。

五戸の旧家、江戸家の総本家、江海又兵衛家、後継ぎ  
がなく絶家となつたので、分家の江渡庄兵衛は本家を守  
るために自分の家をつぶして江又家を建てることした。  
有名な哲学者、江渡秋嶺は江庄の息子で江又家を継ぐの  
である。この江渡庄兵衛は七戸の素封家、成田昆平治家  
からの養子であり、その元が美濃野鹿家へ養子に入り、  
忠四郎妻きゑの姪のぬの夫となつて居る。つまり忠四郎  
は義理の叔父にあたるわけである。従つて忠四郎が五戸  
へ来てもそれなりに縁戚関係があり、また秋嶺などに影  
響もあつたと思われるのである。

国太郎の後見人だつた山口鶯子は、子規門下で虚子と  
双壁といわれた河東碧梧桐と交遊が深いが、山口家も野  
辺地の景運とともに没落してしまひ、文献資料も散逸し  
てしまつて居る。彼は慶応三年の生まれであるから忠四  
郎のことは熟知して居るはずである。鶯子の俳風がどん  
どんものであるか不明だが、単なる江戸文学の系譜上の俳  
人ではなぬと思ふ。というのは碧梧桐は持人生・接自然  
の新風を句早にもたらした人物であり、また同年代、隣  
村の浦野館村に社会の矛盾を悉く叫んだ大塚甲山が中央、  
地方で活躍し、八戸でも青年会の北村益が新知識人とし  
てリーターシッパをとつて古心と号して俳界にも登場し  
てくる。これにたいして野辺地町では鶯子が中心になつ

て明治三十二年在實鳴會が結成されたのである。

たゞし、角鹿忠四郎の法名が、靜善院義山侠文居士、  
というのであれば、恐らくは円転滑脱な性格ではなかり  
なろうし、文字通り、仗氣、男だての人物で、道義の正  
を身命を賭したであろう。とすれば町人、文人肌の鷹子と  
は相性がうまくなかつたのではなからうか。擧事事件で  
中稟官の圧迫には屈しなかつた剛直さは料亭の旦那衆と  
は相容れないものではなからうか。

彼と似た人物で「町誑」に名を残している人物は野坂  
三郎である。野坂については次中清蔵氏が、明治三十  
年頃、小菴明や訂画などに妙を得た人と教示してくださ  
つたが、当時、異色の人物であつたろう。しかし、その  
詩書内容は、彼が単なる変人、奇人ではないことを物語  
っている。その一部をあげてみると、馬場辰猪の「糸約  
改正論」、高橋百侍「内地雜居論」、黒田清隆「庸化新  
論」、高橋五郎「支際論」、「女性真説」、稲垣満次郎「  
對外策」、中江兆民「警世放言」、何礼之「疏球事情」、  
その他板垣退助、鳥尾小弥太、谷干城など、注目すべき  
著者のものが数多くあり、この凶書目録の中に、当時の  
青年の鋭い意識がうかがわれる。角鹿忠四郎の教養とて  
同じではなからうか。

豪商、野村治三郎家の支配人、中市兼之助の子、謙三  
は五戸の自由民権家、中市稲太郎の李家筋から分れた家

の子であるが、絶壁と称し、野辺地世界の指導者であり、  
郷土史家であり、町きつての文化人であつた。明治の末  
に慶應義塾の理財科を出て、社会の動きに鋭い目をむけ  
ていた一人だつた。社会党代議士渋谷悠蔵は中市謙三が  
ら大正の始めに社会主義の概念を手ほどかされたのだとい  
う。(横濱正大氏談)しかし中市は逸民にひとしい生活  
をおくつた。所詮、ケゼルシヤフトにむかぬ己れの姿を、  
野村治三郎代議士の末路に見たのかも知れない。中市稲  
太郎のことも話していたといつたが、これまた一篇の哀話  
として語っていたことだらう。

かの有名な博覧会王、櫛引弓人も立五二、野村新八郎  
家出身の母をもつ、野村に血をうけた奇傑であつた。野  
村銀行と櫛引弓人の紛争に中市支配人が一役賣つていた  
ことは周知の事実である。こうしたことから中市謙三は  
識的に逸民、遊民の生涯を送つたのではなからうか。

そうしてここに私は新時代の苦悩を背負つて生きた三  
様の生き方を知る。その一つは、祖父、中市稲太郎の米  
光に憧れ、青雲の志を抱いて上京し、焦慮の末、中途に  
挫折した中市正亮の例であり、才二は巨富を誇つた立五  
一家の崩壊を目の前にみて、時代の流れから後ずさりし  
て風流に身を任せれた中市謙三の生き方であり、才三は角  
鹿忠四郎の遺児たちが選んだ生き方である。

七戸の自由民権家、山田政一も、中市稲太郎の子供ら

も、落魄しては野村とか西村とか菊万とかの縁戚、豪商の世話をうけ、客分として生活していた。しかし、角鹿忠四郎の子どもたちだけは、天は自ら助くるものを助くという気概からか、はたまた義山侠丈居士の父の血を引いているためか、他を頼らず、剛毅に自力で生き抜いて行った。歌棄で若い生命を散らせた彦六、貞三にしても、養父は松前藩の御用商人として富を誇り、実母は氣丈夫で何百人というヤン衆を指揮した人物である。樺木下りをし、苦学に体を損ねるような生活はしなればすんだものだったともいえる。しかし彼らは養家に甘えず進んで友の直を歩み中途にして倒れた。国太郎の生き方も忠四郎の面影を彷彿させる。十三才から徒弟奉公をして主家によく尽し、独立してからも人には良く尽し、官憲の正道にも屈しなかつたという。

このことは、一面平民出身の先覚者、並びにその系累の辿る道がいかに苦しいものであるかをよく物語っている。それだけに角鹿忠四郎はすぐれていたであろうし、反面危険人物視もされたであろう。明治の野辺地は表面上、豪商に支配された穏やかながら、その中にも彼らの支配をおびやかす人間も存在していた。同じ角鹿家でも一家を捨てて流浪の旅をし、神戸で窮死した人物もあり、ひばり牧場をめぐる騒動、中派昆一郎の存在など陰謀問題があり、こうしたことも忠四郎の死没地が不明

になる一つの背景であつたろう。

### むすび

私は角鹿忠四郎の短い一生は、近代への脱皮に遅れをとつた野辺地町の運命を象徴しているように思う。

鮫築港に政界の総力をあげ、自由民権運動には士族の知識、豪農の財力を綜合的に傾注して殖産短しあつた入戸地区と、前朝資本の寡頭支配の上に守住した野辺地の差が、町勢発展の推移の中にもみられ、近代へのエネルギーは町を素通りして青森や海峡の彼方の壱館へ吸い上げられてしまつた。俳句などの文化のきらめきは、燦火の消える前の一しきりのぬくもりであつた。

再鹿忠四郎らが身命をなげうって主義のため挺身した明治十三、四年頃の青森県は「民情危懼、獎勵に及びず、更に南明の何物たるかを稱せず、郊原荒蕪たるは全国に冠たり」の瘠土にして、雑穀を以て生活するもの、人民十の八に居る。飲食衣服の疏なるは比するに地なし。多くは麻布を着し、村落人民は牛馬と共に傳息するに似たりし（朝野、明治、8、12）と評せられている。郡鄙田用の文字を解びざるもの過半という時代に、自由民権家たちはどのようにして運動を進めていったのであるうか。また彼らを羽の父老たちはどのように迎え入れたのであるうか。

明治十三年八月十二日の「東京日マ」に山梨県の種株が報じられており、時の政府に向向うこと自体を惡とする宿老たちは、藩時代の一撓失敗の例をあげ、「当國は他國と違ひて不平士族と云ふもの無きに、余計なる人の荒押して騒ぎ廻るは到底わが甲州の恥辱なり、右様の室みは早々思ひ切り、分相亦に宍相、葡萄の肥養に氣を付けて、蚕糸等の業を励まば、政府の思召しにも叶ひ、子々孫々永続して、家畜み繁盛すること疑ひなし、ゆめ／＼不了而すべからず」と若者たちを説諭したという。新聞では波りを文政、天保の古物と酷評しているが、青森県の受けとめ方も似たもので、新知識を等び、青雲の志に燃光る若者はとも角、裏山漁村の家長たちの頑意もそんなところにあつたろう。

青森県の自由民権派は、明治十四年一月、河野玄中らの東北有志会に入り、後に東北自由党のメンバーとなつた。主たる任務は北海道の遊説である。東北自由党の規約では、青森県から十名の総代人を出すことになつてゐるが、そのメンバーは不明である。恐らくは義塾派が主であるが、南部側からもバランスの都合上、二、三名が任ぜられてゐるはずである。再鹿忠四郎がこの中でどの地位を占めたかは今後の資料探求によるが、新知識の彼が活躍したであろうことは充分推察できる。

長谷川竹南が県南の政治家を探訪して得た結論では、

県南地区の政党奔達の原因は三つあつて、一は盛岡自由民権派の領導、二は取駒事件、三は百五十銀行事件であつた。また上北郡は陸奥改進黨の所屬で、鎌田政通と手を共にし、山田改一、上崎光一郎、再鹿良石、四、江渡儀兵衛らが地方を代表して同党に所屬してゐた。かかる状況では自由党左派に屬してゐる角鹿忠四郎が、その志を伸ばす余地はなかつたであらう。さりとて取駒事件の農民を秩父的に組織化することも不可能で、確固空しく、徒らに『義』『侠』の名を留めるだけに終らざるを得なかつたであらう。

#### あとがき

小論ではあるが、まとめるにあたり色々互方から御協力をお願いいたしました。本文中に明記した方々のほかに、研究の当初から御病氣中にもかかわらず、野辺地に不察内な私にその人脈についてあれこれ御教導をたまわつた角鹿哲次氏、戸籍関係の福田武雄氏、再鹿家について色々話していただいた再鹿伸、大釜さよ、齋山ふじの、再鹿福之の諸氏、霞寮に閑遊した霧良彦、山口良太郎先生、それに西村豊寿、平野義太郎両先生、私の販場の馬場重治、吉米地孝雄両先生、その他明記しませんが、数多くの方々の御協力に厚くお礼を申しあげます。

(六七、四、二十三)

(追補)

角鹿忠四郎の意向について、一つの推論として大井憲太郎の内で法字を字んだのでは好いかといつたが、この夏休みに、野辺地町、角鹿扇之屋に伝わる、角鹿「要留綴」、乙才一号し、明治七年より十六年までの十年分、乙号とは類、同届兼私用貸借上諸文の下書留であり、甲号は公的のもの、丙号は酒屋関係書類である。を拜見する機会を得て益々その考を強めた。

丁号なる、同留書に、角鹿忠四郎は角鹿吉兵衛の弟として出てくるが、最初に登場してくるのは、明治十一年四月七日の角鹿吉兵衛より野辺地警察署宛の代人頼に書いてある。

この事件は、角鹿吉兵衛が同町の熊谷徳松へ貸しつけをしたが、いかなる事情か、徳松長男又松を相手に貸金催促のトラブルが明治九年、十年と続き、すでに青森裁判所で争われている同趣であった。

忠四郎について、吉兵衛は「私弟」といい「私の家事取仕居候者」としている。つまり明治十一年には、柴崎忠四郎はすでに角鹿きふと結婚し、角鹿の主要人物と戻っているわけである。吉兵衛は明治七年に父の死去により襲名したばかりである。また、当時、角鹿吉兵衛と柴崎権三郎とも相当親密であったようで、金銭関係の保証

人もよく引き受けている。

ともあれ、角鹿忠四郎が歴史文献に現われてくる才一頁が裁判問題においてであり、彼自身が「在任」代理人の弁でも、相手が「請求の権利を拒く」といふ表現を使つており、単なる商人の文章でないことを示しているのは、忠四郎が新時代の知識人の才能をもつていふことを示しているのである。

忠四郎が登場してくる才二番目は、明治十五年二月十六日の記事の酒屋約定規則においてである。彼はここでは、橋本伊三郎とともに酒屋道約取立人となつており、この時の酒屋は野村治三郎ら、既述の入野の豪商たちである。忠四郎は、明治十五年の段階——自由民権運動の昂揚期——においてまだ野辺地の豪商たちとつながっているものであり、しかもそれは、彼らより一段低い使役人的立場にあつたのである。地方の大抵の自由民権論者が書記的地位にあつたが、忠四郎の場合は前朝商人の代弁的地位にあつたといふよう。

しかし、忠四郎の果たした役割を過小評価はできない。守せむら、「要留綴」の中に、明治十六年八月十四日付の「自由新聞」の雑報欄の抜粋が載っているのである。その内容は政論的なものではなく、農林水産関係の書籍出版の案内で、書名は、農成全書、成杉図説、欧米豪商立志編、商業汎論、工業製造、鉄道運築編、大日本樹丹

誌、大日本水産誌、養魚新報である。

このことについて私は二つの点を指摘したい、オ一は、明治十六年の時点において、野辺地の豪商が自由党の機関誌を購読して、そのメモをわざ／＼作成しているという問題意識である。

オ二はこのメモの内容に示される問題意識の内容の特質である、つまり地方の豪商にとって問題なのは、政論よりも殖産興業面で効用なのである。ここで言えることは、自由民権論、運動は地方にこつては抽象的無理念として受容されたのではなく、新技術導入という実利上の必要からなつたのであることである。

この際、角鹿忠四郎は新知識導入のパイプ役になつていたと思う。そして、パイプ役、書記役という傍き役から主役に上るうとし、独立性、リーダーシップを発揮した時に、忠四郎の存在が抹殺されたらと思う。またこの過程において、忠四郎自身、焦りから大きな失敗、運動の挫折を犯したのではなかつたか。その証拠が明治十六年七月の角鹿吉兵衛が野村治三郎、角鹿良右エ門に宛てた忠四郎に係わる保証人としての義務、責任完了の念書である。

この時の借金は五戸の金次三郎や角鹿良右エ門から前年の明治十五年七月二十八日、六百円を借用したので、野村新八郎、角鹿吉兵衛が保証人となつてゐる。しかも

その後も借金が続いたらしく、合計が相当の額になつており、借り主も忠四郎一人ではなく、三人組であつた。従つて吉兵衛は弟忠四郎に關係する責任分だけは支払うということの念書を出しているのである。

この六百円という、当時にしては相当な額の借金が何の目的に必要であつたか、また何に使明したかは一切不明である。私的存続興費か、産馬組合事件の訴訟費か、自由民権運動救済にかられたのか、一切は今後の調査をまよければわからない。明治十六年は、近六入戸の主たる親ともいへべき浦山太吉が、大暴風雨のため、身代をかけた協商会の持ち舟を失つて破産に直面した年であり、一方、日本鉄道を中心に企業熱も高まつており、業外でのような面に手を出した失敗であつたかも知れない。

この後、明治二十二年に角鹿きゑと離婚し、明治二十五年、死没地ささだかでない窮死をとげるのであるが、波瀾万丈を極める末路は一体何を物語つてゐるのであるうか。